

金剛坂遺跡発掘調査報告

1971

序

明和町の斎宮地域は、石器時代からの、数多くの遺跡を今に遺して考古学上の貴重な研究資料を提供しています。

そのうちの一つ、古くから知られた金剛坂遺跡の一割が砂利採取されるに先立って、発掘調査が必要となり、本年3月1日から3月25日に至る期間に調査を実施しました。

調査に際しては、県教育委員会副参事本石独芳氏をはじめ県農林水産部開拓殖課、松阪農業事務所、松阪砂利株式会社及び地主の方々には格別のご協力とご配慮を賜った。

お陰をもって、方形周溝墓をはじめとした貴重な文化財の数々を明らかにすることができ、実に喜ばしい限りです。

ここに改めて、関係者各位に深く感謝の意を捧げる次第です。

昭和46年3月31日

明和町教育長 潮 谷 英一

例　　言

1. 本書は明和町教育委員会が昭和45年度国庫補助事業としておこなった明和町金剛坂864
～866番地所在の金剛坂遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は次の体制で行った。

調査主体 明和町教育委員会

調査担当者 下村登良男（三重県教育委員会社会教育課）

　　山沢義貴（　　〃　　）

　　谷本鉄次（　　〃　　）

3. 発掘調査後の遺物の整理及び報告書作成は、山沢、谷本が分担して行った。

I、III、IV（A・B） 谷本 II、IV（C～E） 山沢

V、山沢・谷本

4. 発掘調査にあたっては、松阪砂利株式会社、県農林部開拓拓殖課及び松阪農業事務所
の全面的協力を得た。

5. 発掘作業には中川栄之助氏をはじめ地元金剛坂、牛葉部落の方々の協力を得た。

また報告にあたっては、奈良国立文化財研究所佐原真氏、小笠原好彦氏、安達厚三氏、
三重県文化財専門委員森田利吉氏に多くの御教示を得た。記して謝意を表する。

目　　次

I 前　　言	1
II 位　　置	2
III 遺　　構	3
A 繩文時代	3
B 弥生時代	4
C 飛鳥時代	5
D 鎌倉時代	6
IV 遺　　物	6
A 繩文時代	6
B 弥生時代	8
C 古墳時代	12
D 飛鳥時代	13
E 鎌倉・室町時代	16
V 結　　語	18

図 版

- PL 1 金剛坂遺跡位置図、発掘区位置図
- PL 2 遺構平面図 1
- PL 3 遺構平面図 2
- PL 4 繩文時代土器
- PL 5 繩文時代土器、弥生時代土器
- PL 6 弥生時代土器
- PL 7 弥生時代土器
- PL 8 繩文時代土器、弥生時代土器
- PL 9 弥生時代土器、石器
- PL 10 古墳時代土器、飛鳥時代土器
- PL 11 飛鳥時代土器
- PL 12 飛鳥時代土器
- PL 13 飛鳥時代土器
- PL 14 飛鳥時代土器
- PL 15 飛鳥時代土器
- PL 16 飛鳥時代土器、鎌倉時代土器
- PL 17 遺跡遠景、遺跡近景
- PL 18 方形周溝群
- PL 19 S X31・32、S X14及びS K15
- PL 20 S X36、方形周溝内埋土断面
- PL 21 土器出土状況
- PL 22 S B 1・S B 8
- PL 23 繩文時代土器片、弥生時代前期土器片
- PL 24 繩文時代土器、弥生時代土器
- PL 25 弥生時代土器、石器、古墳時代土器、飛鳥時代須恵器
- PL 26 飛鳥時代土器
- PL 27 飛鳥時代土器
- PL 28 飛鳥時代土器、鎌倉時代土器、五輪塔

I 前 言

東京国立博物館に所蔵されている三重県齋宮村金剛坂出土のバレス式土器は、古く明治年間に地元の櫛谷由太郎氏によって発見され、寄贈されたものであるという。その出土地点は現在の国道23号線の南側の畑である。^① このバレス式土器の出土以降も、金剛坂遺跡からは多数の土器片をはじめとし、石器も採集されている。中でも、故鈴木敏雄氏は繩文時代後期の土器片、石器を採集している。又、開墾によって相当数の古墳が壊され、須恵器も多数出土したという。このように、^② 金剛坂遺跡は繩文時代より歴史時代にいたる各時期の遺物を出土し、その規模も相当大きく、県下有数の遺跡であろうと想像されてきた。^③ 県遺跡地図に於いても、その範囲は国道を挟んで南北500m、東西100~200mに亘って記載されている。

金剛坂遺跡の北端部に於いて、砂利採取が行われ、土器片が多数出土していることを明和町教育委員会が知ったのは昭和45年の6月であった。これは数年前より水田に面した1ヘクタールの畑地の地主によって、砂利採取後に水田化する計画がたてられたことにその端を発する。砂利採取業者は農地の一時転用申請を松阪農業事務所に提出したが、申請の許認可にあたっては、事業規模も小さく、当時は文化財に対するチェックが充分でなかったために、教育委員会に協議されることなく申請が許可されてしまった。許可をうけた業者は事業地の一部を砂利面まで排土したところ、土器片が多数出土したのであった。

町教育委員会は早速、県教育委員会にこの事を報告した。そこで、現地調査が7月上旬に行われた。排土による盛土中には各種の土器片が多数見られ、土取りによって生じた畑の断面には長さ20m、厚さ30~60cmの黒褐色の遺物包含層が確認され、弥生時代前期の土器片が採集された。現地調査の結果を転用を許可した県農林部に連絡するとともに協議をもった。県農林部は10月上旬に、文化財の取り扱いについて合意が出来るまで、砂利採取をストップすることを業者に申し入れた。

その後、砂利採取業者、地主、町、県教育委員会の間で数回協議が重ねられた。そして、遺物包含層の認められる畑地については発掘調査を行うこととし、山林地については試掘調査を行って、その結果によって工事の可否を判断することとなった。試掘調査は11月20日に実施した。しかし、遺構、遺物は認められず、遺跡は此の個所にまで及んでいないと判断し、11月末業者に対し、山林地についての砂利採取の許可を連絡した。

一方畑地についての発掘調査は、昭和45年度国庫補助金の交付をうけて、明和町教育委員会が主体となって、昭和46年3月1日より行った。発掘作業には地元の金剛坂、牛葉部落の人々の協力を得た。作業に先立ち、原点を畑の東北隅に求め、2mグリッドを設定した。グリッドの呼称

は東より西へ向ってはアラビア数字を、北より南へ向ってはアルファベットを与えた。既に排土された畑からは弥生式土器片が採集しているために、東側の畑よりG列を中心に発掘をはじめた。G列に於いては飛鳥時代の土器片が数点出土した。(G、12)区では甕形土器が一個体見付かり、この周辺を拡張することにした。一方、このG列に直交する形で10、26、41列をグリッド掘りを行った。26列では溝の一部とそれを切り込む土塙が見付かり、この部分も拡張することにした。一方、南側の畑では弥生式土器、縄文土器片が散見されたが、耕作土が厚く、地山まで約90cm程であった。このため、この地区のみをブルドーザーによって、表土を除去することにした。

当初の東側の畑に弥生時代の遺構が検出出来るのではないかという予想とは異なり、南側の畑から方形周溝、土塙が見付った。又、(G、12)区では飛鳥時代の住居址が、26列付近では方形周溝と土塙が見付った。

調査は発掘総面積約900m²に及び、3月25日に終了した。

① 後藤守一「東京帝室博物館所蔵の弥生式土器」考古学5-3 1930

② 櫻谷松氏譲による

③ 鈴木敏雄「三重の遺跡と遺物」第一集 楽山文庫 1949

④ 三重県教育委員会「三重県遺跡地図」1969

それらは丘陵麓、台地上、自然堤防上に分布する。主な遺跡をあげれば、台地西端部では、奈良時代大溝・中世土塙等が発掘された古里遺跡⑩、斎王跡と伝承される東西500m×南北900mの広大な斎王遺跡⑪がある。また字勝見第二から字平尾・字赤坂にかけての台地上には、北野遺跡⑫、志田遺跡⑬、赤坂遺跡⑭等、数万haの遺跡がみられる。

一方古墳としては、南方の玉城町との境の丘陵上と洪積台地上に後期の群集墳が多く分布している。丘陵西端部には西から後期横穴式石室を主体とした全30基の河田古墳群⑮・画文帶神獸鏡を出した1号墳をふくむ全23基の神前山古墳群⑯・径48m高さ7mの大円墳をようする全16基からなる大塚山古墳群⑰・前方後円墳1基をふくむ全23基の天皇山古墳群⑱等、多くの古墳群が所在している。また台地上にも開墾からまぬがれた古墳群として全12基の円墳群塚山古墳群⑲・前方後円墳1基をふくむ全6基の坂本古墳群⑳がある。

()内の数字は第1図の番号に相当する。

① 三重県教育委員会「三重県遺跡地図」1969

② 明和町教育委員会「古里遺跡試掘調査報告」1970

③ 渡田正一「伊勢湾沿岸の画文帶神獸鏡について」「近畿古文化論叢」1963

三重大学歴史研究会原始古代史部会「多気郡神前山古墳について」「ふびと」25 1966

④ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「伊勢湾西洋における前方後円墳・多気郡天皇山古墳について」「ふびと」29 1968

⑤ 三重大学歴史研究会原始古代史部会「阿山郡大山田木鳴塚古墳および多気郡明和町坂本第1号墳について」「ふびと」29 1968

II 位 置

県境を南北に走る紀伊山脈中の高見山に源を発する櫛田川は、東流して松阪市南部および明和町西部にいたり肥沃な沖積地を形成して伊勢湾に達している。この櫛田川の下流東岸の明和町側では、大字岩内附近で沖積地との比高約6mをはかる洪積台地が南東にのび、大字馬之上附近まで達している。

金剛坂遺跡は、この洪積台地上でも沖積地をのぞむ西端部に位置しており、発掘地点附近ではおよそ4mの比高がある。遺物の散布する範囲は、非常に広く台地西沿にそって南北約500、東西200m~100mあって、およそ7万haにおよんでいる。今回調査を実施したのは、このうちの北西部で、行政上は明和町大字金剛坂字金剛坂864~866番地にある。

ところで、伊勢湾西岸部では、大河川が平地に出る附近の台地上およびその背後の丘陵には、多くの遺跡がみられるが、この金剛坂遺跡の周辺も南伊勢における各種遺跡の集中するところである。しかし先土器時代、縄文時代の遺跡は、中流域の勢和村、多気町に集中しており、明和町①では、この金剛坂遺跡以外には発見されていない。

弥生時代の遺跡としては、北西500mの自然堤防上に下尾遺跡⑩、東方2.2kmの台地上に北野遺跡⑪、南方の丘陵麓に岩内城山遺跡⑫、天皇山遺跡⑬、中世古遺跡⑭がある。

古墳時代以降の遺跡は昭和45年度の中南勢遺跡分布調査によって多くの遺跡が発見されている。

III 遺 構

縄文時代土塙、弥生時代土塙・方形周溝、飛鳥時代土塙・住居址、鎌倉時代溝址等がある。いずれも地山の黄褐色土を堀りくぼめたものである。縄文時代より奈良時代にかけての遺構には黒褐色土が、鎌倉時代の遺構には茶褐色土が充満している。黒褐色土の各時期による識別は困難であった。層序は今回の調査地点の北側では耕作土下に暗茶褐色土があり、地山まで地表より50cm程度であるに対し、南側の部分では耕作土下に20~30cmの黄褐色土がある。これは地主の人の話によれば置土をしたものであるという。そのため当地点では、この黄褐色土下に黒褐色土があり地表より地山まで90cmを測る。地山は上部では均一な黄褐色もしくは赤褐色に近いものであるが30~40cm程度下からは黄褐色土中に多くの砂利を含む層となる。

A 縄文時代

a 土 塙

S K 7 (D-E、8) 区に於いて検出。S B 8 の南東脇である。径1.5×1.9mの不整形な方形を呈する。深さ18cmの浅い土塙である。底面は平坦でなく、北東側に僅かなくぼみが認められる。

中央部より環状の壺形土器が直立した状態で出土した。

S K28 S X26の中央部で発見。径 1.6×1.4 m、深さ43cmの楕円形を呈する。底面は平坦である。僅かであるが縄文土器の細片が出土している。

S K29 S K28の西4mの個所で検出。径 2.2×2 mの長楕円形を呈するものと考えられるが、両端はS X26、30の方形周溝によって切られている。深さ20cm。縄文時代後期の土器片が多数出土している。

S K37 S X31・32の北溝東寄りの部分より、縄文土器片が比較的多数出土した。周溝の一部に楕円形を呈すると思われる土塙の一部が残っていた。

以上の他、S K21、35、52からも一、二片の縄文土器片が出土している。

B 弥生時代

a 土 塙

S K33 S X31、32の東隅に於いて検出。径 2.2×2.6 m、深さ20cmの不整形な楕円形で、浅い摺鉢状を呈する。多数の弥生式土器片が出土。

S K38 S X36の西隅に於いて検出、S X46に南側の部分は重複しており不明である。径 2.8×2.6 m、深さ25cmでS K33によく似た形状を呈しており、遺物の出土も同様である。小形磨製石斧一点が伴出している。

S K39；南側発掘区の東隅に於いて検出。西側はS X36に、南側はS X46に切られているうえ、発掘の関係上、全体を確認することが出来なかった。深さ33cmで底面は平坦、壺形土器が一個体底面について出土。

S K48；S X36の中央部にて検出。径 1.6×1.2 mの楕円形を呈する。深さ17cm。周囲に径30cmの柱穴状のピットが数個見られる。出土した土器片はいずれも細片である。

b 方形周溝

S X14 (A～E、24～31) 区。調査地点の北側で、南溝と東、西溝の一部を検出。幅1.6mで、底面は平坦である。深さは南溝で42cm、西溝で44cm。南溝の全長12.5m。南溝と西溝は1.7mの間隔の陸橋部を有する。南溝の東寄りの部分はS K15によって切られている。南溝の中央底面より壺形土器が、西溝からは小形壺、高杯が出土している。他の周溝での土器の出土は底面より浮いた状態で出土しているに対し、当周溝では比較的底面についている。

先述の如く方形周溝内には黒褐色土が堆積している。重複している部分に於いてもその識別は困難であった。

S X25 南側発掘区の北東隅に於いて検出。東側の一部は砂利採取によって既に破壊されている。又、北側もS D24に、東寄りはS D42、S K53に切られている。周溝の規模は相対する溝の外側で測って、径南北9.5m、東西9.2mを測る。個々の溝の幅は約1.3m、深さ30cm程度である。

南西溝の中央部はわずかに一段低くなっている。北溝は1.5mの陸橋部分を有する。西側のコーナーは他にくらべゆるやかなカーブを描く。周溝に囲まれた中央部は平坦である。遺物の出土はわずかに破片が見られたにすぎない。

S X26 S X25の西3mの個所である。幅1.2mで、径東西10m、南北10.3mを測る。東隅は2mの陸橋部となる。北溝は深さ38cmで底面が平坦な逆台形を呈するが、他の三溝は約46cmの深さで、V字形に近い形を呈する。土器の出土は北溝を除いて比較的纏って出土している。東溝では底面近くに、南、西溝では底面より30cm程浮いた状態で出土。

S X30 S X26の南に接して発見。西側は不明。南北径11.6m、溝幅1.5m、深さ北溝で25cm方形周溝の中で最も浅く、南側の溝は不明瞭となる。遺物の出土は殆んどない。

S X31・32 S X30の東に接して発見。東溝は重複するが、他の溝は並行している。それぞれの周溝の深い方をS X31浅い方をS X32とした。規模はS X31は東西12.2m、南北13.2m、西溝幅1.3m、深さ34cm。S X32は東西約13m南北約12m、西溝幅1.5cm、深さ20cmを測る。中央平坦部には多数の柱穴状ピットがある。遺物の出土は東、北溝に多く見られた。又、この東、北溝の上部からは古式土師器の壺形土器、須恵器大形甕が出土している。

S X36 S X31・32の南溝に交叉して発見、南側の一部未検出。幅1.4m、深さ30cm程度の浅い周溝である。径東西11.2m、南北11.2m。中央部に楕円形のS K48がある。遺物は西溝より壺形土器が二個体出土している。

S X46 S X36の南、東溝に交叉していて発見。幅1.8mで他に比べ広い。深さ40cm。北側の一部のみ検出。大きな弧を描き、方形周溝のコーナーとは考え難く、あるいは別の溝状遺構かもしれない。

C 飛鳥時代

a 住居址

S B1 (E～G、12～14) 区。径 4.5×3.8 mの方形住居址。西側は東側にくらべわずかに短かい。深さ35cm。周溝は認められない。中央部に径90cmのくぼみがある。又、南隅に径1mの範囲に焼土があり、西壁近くに柱穴状ピットが一個ある。中央がS D4によって切られている。住居址内より多数の土師器が出土。特に南隅から纏って出土している。

S B8 (G～D、9～10) 区。径 3×2.6 mの小形の方形住居址である。深さ25cm。周溝及び柱穴は認められず、中央に径65cmのくぼみがあり、南東隅が約60cmに亘って外へ張り出している。その個所が赤く焼けており、小形壺形土器が逆位置で出土。

b 土 塙

S K15 (B～D、24～26) 区。S X14の南溝を切り込んでいる。径 4.5×3.5 mの長方形を呈し深さ東側で57cm、西側で70cmを測り、中央部が段状をなす。南側の壁にも段が見られ、この土塙

は拡張したものと思われる。土塙内から多数の土師器、須恵器が出土。

D 鎌倉時代

a 溝 壁

S D23 (N, 38) 区より (M, 28) 区につづいて発見。幅50cm、深さ15cmの小さな浅い溝である。台地縁辺に直交する。甕形土器・灯明皿等が出土。

S D24S D23の南に2.5m離れて並行して走る溝である。幅1.6m、深さ50cmのV字形を呈する。この溝は (L, 10) 区までつづいており、甕形土器、灯明皿、山茶椀、陶器片が出土。

S D42 ; 第29列に並行して検出。幅70cm、深さ20cmの浅い溝である。S D24に通じている。遺物の出土は少ない。

IV 遺 物

A 繩文時代

1) 中期の土器 (P L 4 - 1 ~ 4)

いずれも口縁部がわずかに内巻する深鉢形土器で、頸部はあまりくびれない。口縁部に楕円形の文様帯をもち、その中を沈線による斜線、綾杉文を描いている。1、2は楕円形の区画の間に円形のくぼみがある。胴部も沈線による文様が描かれるものと思われる。3を除いて砂粒を多く含む、赤褐色を呈する厚手の土器である。

これらの土器は中期終末石瀬第Ⅲ群土器に比定されるものであろう。

2) 後期の土器 (P L 4 - 5 ~ 41, P L 5 - 1 ~ 6)

○磨消繩文の土器

平縁のものと波状口縁のものがある。いずれも口縁部より無文帯、つづいて繩文帯となっている。平縁のものは口縁部が内巻する深鉢形土器が多いが、16のように直立する口縁部もある。5~8は同一個体で頸部で一旦くびれる。この種の他のすべての土器が繩文帯を二本の沈線で区画しているに対し、繩文帯の中に更に一条の沈線が走っている。頸部にも同じ文様帯がめぐり、口縁部文様帯とをつなぐ縦方向の文様が施されている。灰褐色を呈している。9~11も同一個体片で、口唇部に刻目が施される。15の口縁部内側は断面三角形を呈する。16は沈線間に斜線による擬繩文が施される。

波状口縁のものは山状の部分に沈線のある17や、刺突のある18、刻目のある19等がある。17は山の部分に二条の沈線が走り、細かい繩文が施される。18は口唇部の内側に沈線が続いている。20は口縁部をめぐる文様帯が山の部分で縦方向につながる文様となる。いずれも頸部でわずかに

くびれる深鉢形土器と思われる。

22~25は胸部破片である。

○沈線を主体とする土器

26~28は波状口縁をなす。26は赤褐色を呈する固い焼きの土器で、山状の部分に横方向のその下に斜方向の平行沈線を描く。27は山の部分より両方向に楕円形の区画が描かれる。28は山の部分の両側より孔をうがち、それをめぐる沈線が口縁部の外、内側を並行して走っている。29~31は同一個体片で平縁のものである。口縁部は外反し、頸部には低い凸帯がめぐっている。口縁部には半截竹管による弧線が四条施され、頸部にも同様の沈線が六条近く施され、口縁部、頸部をむすぶ縦の沈線も見られる。32は胸部破片である。

また、P L 8-1はSK7より出土したものである。径8cmのドーナツ状を呈するものに口縁部をつけたもので、口径6cm、器高24cm、胸部幅23cmを測る。口縁部は袋状を呈し、口唇部はわずかに直立する。肩部には幅2.5cmの凸帯を二条貼りつけしており、表側では、つながっている。底部はわずかに平坦になっている。両側に縦に走る三条の沈線を描き、それを中心に両方向へ三条一単位で横方向、斜方向へ交互にくり返し施文している。正面の内側に更に一周三~四条一単位の文様が放射状に描かれている。胴部の文様のない部分はヘラ研磨されており、黒褐色を呈する。

○条線、条痕を主体とする土器

33~36は同一個体片で口縁部には横方向の櫛状工具による条痕が施され、その下をわずかに傾斜する縦方向に、その間に波状に施文している。茶褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。口縁部が平坦で、内溝する深鉢形土器である。37は口縁部に横方向の擦痕が認められる。39~41はやや太い条線が縦方向に施文される。P L 5-1は大きく外反する口縁部で卷具によると思われる横方向の条痕が施されるものである。黒褐色を呈する。

○無文土器

黒褐色あるいは暗褐色を呈し、口縁部が内巻する深鉢形土器である。2、4はヘラ削りが見られる。

これらの土器を鈴鹿市東庄内A遺跡の土器群と比べると、繩文のみによって施文される類は見当らない。そして、磨消繩文の中に更にもう一条の沈線の見られる例がある。この手法は愛知県八王子貝塚、中条貝塚や奈良県布留遺跡第五群土器に多く見られる。

又、環状壺形土器については宮城県宝ヶ峯遺跡から注口で小形品であるが、この種の土器が出土している。このような特殊な器形の土器、例えば双子土器や双口土器等は東日本において少なからず見られ、多くは加曾利B式併行期に位置づけられている。

これら後期の土器は掘ノ内式もしくは加曾利B式の古い時期に相当するのではないかと思われる。

鈴木敏雄氏の採集品には、繩文地に渦巻状の沈線を描く堀ノ内式期の破片がある。

⑤

3) 晩期の土器

口縁部がわずかに外反し、頸部に凸帯がめぐり、胸部全面に貝殻による条痕が施される深鉢形土器である。頸部の凸帯の上にも条痕が施される。56は凸帯を指による押えつけによって円形を呈している。いずれも暗褐色を呈する。

B 弥生時代

1) 前期の土器

壺形土器、鉢形土器、甕形土器がある。壺形土器は赤褐色を呈する緊密なものが多く、一部黒褐色を呈するものもみられる。砂粒を含み、ヘラ研磨されているものが多い。甕形土器は褐色、暗褐色を呈し、いずれも砂粒を多く含んでいる。これらは全て前期終末に比定される。

○壺形土器 (PL 5-18~33, PL 6-1~25, PL 8-2~4)

全体の形を窺えるものではなく、いずれも破片である。口縁部が大きく外反し、頸部には数条のヘラ描き沈線がめぐり、肩部より胴部にかけてヘラ描き沈線或は凸帯がめぐり、胴部はあまり張り出さないものと思われる。

口縁部は形状によって五種に分類される。第一種 (PL 5-18~21, PL 8-3~4) は口唇部近くがわずかに肥厚し、口唇部には沈線がめぐる。上端部は指による押えつけで、小さな波状をなし、下端部にはヘラによると思われる刻目のめぐるものもある。口縁部内側に2~3状の凹線がめぐる。18の凹線は一巡しないで間隔がある。20には一孔が穿たれている。第二種 (PL 8-2) はラッパ状に開く口縁部であるが、前者のように受口状にならない。口唇部は外側に稜をなし、一条のヘラ描き沈線がめぐり、それを中心に矢羽状に刻目が施される。頸部にも細いヘラ描き沈線が見られる。第三種 (PL 5-22, 23) は直線的に外反する口縁部破片で口唇部に沈線或は刻目が施される。淡褐色を呈する。第四種 (PL 5-24) はや、厚手の大形品である。口唇部に沈線がめぐり、口縁部内側に稜線が認められる。第五種 (PL 5-25) は更に厚手の土器で赤褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。前者にくらべ立ち上がりが急で、口唇部は丸くなる。頸部には二条の肥厚する部分があり、その上部には朱塗りの痕跡が認められる。

頸部破片 (PL 5-26~33) はいずれも赤褐色を呈しており、ヘラ描き沈線が多く見られる。26は頸部のくびれ部に断面三角形の凸帯がめぐり、27は二条の凸帯上を指によって押えつけている。ヘラ描き沈線は29、30のように太くて凹線状をなすものもみられるが、多くは細く深い沈線である。PL 6-1は横方向の沈線の間に鋸歯状に数条の沈線を描いている。肩部には平行沈線を数条描く。

肩部および胴部の破片 (PL 6-2~23) はヘラ描き沈線と凸帯が多用されている。ヘラ描き沈線は平行に走る横線のあいだを鋸歯状に描く2、4、6や、綫杉を描く3等があり、14は縦の孤線を横線上に描いている。17~19のように胴下半部にもヘラ描き沈線が数条見られる。凸帯はその上を指で押えつけた4、8~10、12、13や、ヘラによる刻目をつけた3、5、11、16等があ

る。8は凸帯上に沈線をひいたあと、櫛状工具による刻目が施される。8の凸帯は部分的に肥厚している。凸帯は横方向のものが一般的であるが、12のように縦方向の凸帯によって格子目をなすものもある。12は青灰色を呈した脆弱な土器である。20は五条の沈線が弧状に描かれる。以上の他に21~23のように、半截竹管による並行線が数条めぐるものがある。21、22は焼成、色調等甕形土器に似ており、ヘラ研磨もみられない。

24、25は表側にや、太い凹線状の沈線がめぐり、内側に段状部分のある破片である。いかなる器形をなすものが判然としない。淡褐色を呈し、細砂を含んでいる。

○鉢形土器 (PL 6-26)

真直ぐ外方に張り出す口縁部破片で、や、厚手である。口径は小さく小形品である。縦方向に刷毛目を施した後、ヘラ描き沈線を数条横方向に描いている。淡褐色を呈する。

○甕形土器 (PL 6-27~29, PL 7-1~3, PL 8-5, 6)

PL 8-6はSK39より出土した口径28cm、器高29.5cmの大形品である。口縁部が直角に近く外反し、わずかに肥厚する。口唇部には斜めの刻目が施されている。胴部は縦方向の細かい刷毛目を全面的に施こし、そのあと頸部近くに半截竹管による沈線が二段めぐる。PL 7-2も同様のものである。PL 6-27は器高12cmの小形品で、全面に細かい斜めの刷毛目が見られる。口縁部の外反は前者にくらべゆるやかである。

2) 中期の土器

○広口壺形土器 (PL 7-6・7, PL 8-10)

口縁部が大きく外方に反り出すもので、口唇部がその上部で平坦部をなし、端部が垂直に近くなるものと、ゆるやかなカーブで外方に反るものとがある。PL 7-6は厚手の土器で、口唇部に波状の櫛目文が描かれる。赤褐色を呈する砂粒の多く含む土器である。PL 8-10は口縁部上端にわずかなくぼみをなし、口唇部に二本の沈線がめぐっている。頸部には細かい刷毛目が施される。PL 7-7は表側にはや、太目の櫛描き横線文を口唇部近くから描いており、口唇部内側には、四条の波状文を描いている。

○細頸壺形土器 (PL 7-4・5・8~18, PL 8-7・9, PL 9-1・2)

口縁部についてみると、多くは口唇部が垂直に立つか、わずかに内湾して受口状をなす。たゞPL 7-5のみは口縁部の変化は見られずに、口唇部に刻目をめぐらす。口縁部より頸部にかけては四条一単位の櫛描き横線文が施されている。受口状をなすものも、口縁部より頸部にかけて櫛描き文を描くものが多い。PL 7-4には波状文が見られる。又、無文のもの (PL 8-7, PL 9-2) 及び櫛の刺突、ヘラ描き沈線のもの (PL 9-1) もある。

頸部より胴部へかけては櫛描き横線文、波状文或は簾状文が見られる。PL 7-16のように斜行して格子目をなすものや、18のようにヘラ描き沈線の間に櫛描き横線文を描いたあと、縦方向に走らすものもある。PL 8-7はわずかに刷毛目が残るが、全面にヘラ研磨された無文土器で

ある。胴上半部は縦方向、下半部は横方向にヘラ研磨している。赤褐色を呈する。胴上部、下部に一個づつ、故意に穿孔したのではないかと思われる孔がある。PL 8-9は褐色を呈するものであるが、保存はあまりよくない。頸部より胴部にかけて櫛描き横線文が施されるが、その数は確認出来なかった。その下には波状文が見られる。胴下半部は横方向のヘラ研磨である。PL 9-1は全面縦方向の刷毛目による調整をしたあと、口縁部及び肩部に櫛状工具の刺突とともにヘラ描き沈線が頸部に二条、肩部より胴部にかけては七条めぐらす。胴下半部は横方向のヘラ研磨である。

PL 8-11・12は底部破片である。ともに焼成後の穿孔が見られる。

○無頸壺 (PL 8-8)

器高4cmの小形の手捏土器である。口縁部は水平でない。褐色を呈し、砂粒を多く含む。二個の孔が対にあけられている。

○壺形土器 (PL 7-19~37)

口唇部に刻目を有し、胴部には全面刷毛目が施されるものが多い。19、22の頸部には沈線が數条見られ、口縁部内側にも横方向の刷毛目が施されている。いずれも褐色、黒褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。23、24は前者とやや異なり、表面が清らかな黒褐色を呈する土器である。

26~37は条痕が施されるものである。一部或は前期に伴うものがあるかもしれないが、一応ここでは一括して中期とした。条痕は羽状のもの、斜行するもの等があり、その幅も29のように細いものから、37のように太いものまである。褐色、茶褐色を呈する固いもの、灰色を呈する脆弱なものがある。25は口唇部及び内外端部に刻目を施こし、表側には波状文が、内側には太くて浅い凹線が施される土器で、他の土器と異なり、淡い黒紫色を呈し、内部は白色で砂粒を多く含んでいる。いかなる器形を呈するものか判然としない。

以上、中期の土器の多くは貝田町式土器に比定されるものであろう。PL 8-7の無文の土器やPL 9-1のヘラ描き沈線が肩部より胴部にかけてめぐる例はあまり聞かない。刷毛目のあとヘラによって消す手法の土器は古く吉田富夫氏によって報告された龜山市下ノ庄出土の土器に見られる。^⑦又、広口壺としたものは朝日式に遡るものかもしれない。

(3) 後期の土器

壺形土器、壺形土器、高杯形土器がある。いずれもSX14、26の方形周溝内より出土したものである。

○壺形土器 (PL 9-3~6・8~11)

3は頸部があまりくびれずに、底部より胴部にかけてなだらかにつづき、や、胴長の土器である。口唇部は断面三角形を呈し、外側に稜をなす。肩部付近に三条の櫛描き波状文が部分的に施文されている。胴上半部、下半部には縦方向のヘラケズリが見られ、その痕跡を残している。茶褐色もしくは淡い褐色を呈し、表面は剥落が多い。4・5は底部破片である。厚手の底部でわざ

かに中央部分がくぼむ。4は赤褐色を呈する繊微な土器で、横方向の刷毛目のあと、縦方向のヘラケズリをしている。5は3に似た焼成で、胴中央部分に剥落が多く、恐らく縫目よりはがれたものと思われる。6は小形品でや、縦長の土器である。つくりはあまりよくなく、底面も平坦でない。底部内面には指による調整のあとが見られる。8~10はいずれも同形態をなすもので、3にくらべ頸部のくびれが大きく、胴部は球形に近くなる。口唇部の形状は3に似る。淡い褐色を呈し砂粒を含んでいる。全面ヘラ研磨されている。11も同様の球形の器形をなすものと思われるが、底部が凸出している。

○壺形土器 (PL 9-12)

SX26の周溝内より出土したもので、口径10cmの小形品である。口縁部が大きく外反し、胴部も外へ張り出す。口縁部はヨコフテ、胴上半部には縦方向の細かい刷毛目が施されている。淡い褐色を呈する。

○高杯形土器 (PL 9-7)

SX14の周溝内より出土。椀形を呈する杯部に、部厚い底部がつき、脚部は真直ぐ外方に張り出している。3の壺形土器に似た焼成で、表面は剥落し易い。杯中央部に粘土の縫目が認められる。

後期の土器は全て幾内第V様式に相当する。PL 9-4付他の壺形土器にくらべや、胴長で、頸部に波状文が見られるが、口唇部のつくりは同一であり、この範疇と思われる。

(4) 石器

石斧及び磨石がある。磨石は縄文時代に伴うものと思われるが、ここで一括して述べることとした。13の小形磨製石斧は長さ5.2cmの揆形を呈するもので、刃部の幅3cmの片刃であるが、背の

遺構 図版	PL 4	PL 5	PL 6	PL 7	PL 8	PL 9
S K7					1	
S K28	38・39・40					
S K29	4~13・20・22~24					
S K37	18・27		9・16			
S K38		18	3・8			13
S K39					6	
S K33			12	29・32	4	
S X31・32					10・11・12	
S X36					7・8・9	
S X14						3・4・5・6・7
S X26						8・9・10・11・12

表 縄文、弥生土器遺構別対照表

中央部が厚くなっている。珪岩製。15は長さ18.5cm、幅8cmの大形の打製石斧である。片面は平坦である。緑色片岩製。16の磨石は長さ11cm、幅6.5cm、中央部厚さ2.2cmで、上端部を僅かに打ち欠いている。石英班岩製。

なお、今まで述べてきた縄文、弥生時代の遺物の中で明らかに遺構に伴うものについては前頁に表にして掲げた。

C 古墳時代

古墳時代の土器の出土例はごく少く、溝・土塁等からまとまって出土したものはない。その種類は、須恵器・蓋・甕、土師器としては碗・鉢・壺等がある。

(1) 須恵器 (PL10-5)

○蓋 (5) 丸い天井部と口縁部の境に、鈍い稜をもった薄手の製品である。口縁端部は内傾する面をつくる。天井部は図中一点鎖線を引いたところまで、左まわりのロクロでヘラ削りを施している。

(2) 土師器 (PL10-1~4・6)

○碗 (3) 口径12cm、高さ5cmをはかる、小さな平底と口縁端部が小さくたつ椀である。内面と口縁部外面は横なで、外面は成形時の指先おさえの痕がそのまま残る。茶褐色を呈する。

○鉢 (4) 口径12.5cm、高さ5.8cmをはかる楕形の体部に外反する短い口縁部のつく鉢である。保存状態が悪く整形技法は不明。茶色を呈する。

○壺 (1・2・6) 器形の異なる壺が3例出している。1は丸い体部に短く外反する口縁部のつく壺である。器壁の保存が悪く、技法はわからない。茶褐色を呈している。

2は1とよく似た口縁部をもつが、体部はやや長く、底部は小さな平底状になっている。底部には木葉の圧痕がついている。器壁は土器の大きさからみて全体に厚い。口縁部内外面は横なで体部は内外ともなでいるが、外面には一部ハケ目が残っている。また体部外面の二ヶ所に大小の黒斑がある。灰褐色を呈する。

6は口径18cm高さ28.5cmをはかる口縁部内外面と体部上半に赤色顔料を塗った大形丸底の壺である。外反する口縁部は端部で小さく折れ曲って二重口縁状を呈する。口縁部は内外とも横なで体部外面は縦方向のハケ目の上を間隔をおいてヘラで磨いている。内面は上半を横に下半を斜めにハケ目を施し一部を横にヘラ削りしている。灰茶褐色を呈する。

古墳時代の土器は少い。須恵器蓋は、6世紀前半におかれるとMT15型式に比定される。また、^⑥土師の碗・鉢と平底の小型壺は須恵器と同時期のものであろう。赤色顔料を塗った大型壺と小型の底の丸い壺はこれより古い古式土師器にあたるものと思われる。

D 飛鳥時代

この時期の遺構は先の弥生時代について多い。したがって出土遺物も他の時期に比べて多く、また遺構毎にまとまって出土している。なかでも、SB1では多量の土師器が、SK15では多くの土師器と少量の須恵器が、SB8では土師器が出土した。これまで伊勢においてはこの時期の土器の出土例はいくつかあるが、須恵器が共存し、量的にもまとまって検出された一括資料は少い。そこで、ここでは多少記述の重複になるが、遺構毎に記すことにした。

(1) SB1出土の土器 (PL10-7~21, PL11, PL12, PL26-96)

土器はSB1のなかでも南半部に多く、特に南東隅の焼土附近に集中していた。その種類は、土師器が圧倒的に多数をしめており、須恵器は杯・蓋・甕の破片が数点検出されたにすぎない。土師器は、杯A・皿・高杯A・甕B・甕C・円筒甕・方柱甕・鍋・甑等がある。土器の保存状況は相対によくない。

a 須恵器

須恵器は前述のように杯1・蓋1・甕片数点出土しているにすぎず、図示できるのは杯1点のみである。7は口径15cm・高さ約4cmの外反する口縁部をもつ杯である。残存する底部下面は調整のヘラ削りではなく、ヘラ切り不調整底と思われる。蓋はSK15出土の37に類似した口縁部の破片である。

b 土師器

○杯A (8~11・96) 8・96は口径11.5cm・高さ3.5cmの小型の杯で、口縁部は厚くつくられている。内外面ともなでている。暗文はない。9~11は口径17~20cm、高さ5~5.3cmほどの外傾する口縁部をもつ杯。10では底部と、口縁部の上方（図中で1点鎖線を引いたところ）までヘラ削りをしており、9と11では底部から口縁部下方までヘラで削っている。内面はなでており、暗文はない。底部の破片で杯か皿かわからないが、上面にラセン状暗文のあるものが2点ある。

○皿 (12・13) 口径20~21cm、高さ3~3.5cmの皿で、口縁部と底部の境は丸い。底部下面是ヘラ削り、口縁部と底部内はなでている。

○高杯A (14) 縦にヘラで削って面取りをした脚部の破片である。断面は14角形である。脚端部はないが、短い脚であろう。

○甕A (15~20) 口径15~16cmをはかる外反する短い口縁部と丸い体部の小型の甕である。口縁端部のつくりには、丸くおわるものと、わずかに上にもちあがるもの、外面に鈍い稜をつくるものがある。底部まで完形のものはないが、15はSB8(61)のような平底に近い底部のものと思われる。体部外面はすべて縦ハケ目がある。内面は横方向のハケ目のあるものと(15~17)ないもの(18~20)があるが、その下方はいずれも斜にヘラ削りしている。

○甕B (26~28) 口径約23cmをはかる外反する短い口縁部と、長い体部からなり、器高はおよ

そ38cmになる。口縁部外面はわずかにふくらみ、胴径は口径よりやや大きい。口縁部内面は横ハケ目のあるものと、ないものがあり、外面は横なでしている。体部外面は縦ハケ目を施すが、底部近くになると、ハケ目の方向は不定方向になる。内面は上半を横ハケ目、下半を斜にヘラで削っている。

○甕C (21・22) 外反する短い口縁部に、体部下半を欠いているが、口径より大きなよく張った体部をもつ甕。22の口縁端部はわずかに内寄する。体部外面は両者とも斜めのハケ目があるが、内面は21では横方向のヘラ削り、22では横ハケ目となっている。

○円筒甕 (23) 口径16cm、推定器高35cmの円筒状の甕である。口縁部はわずかに外反する。外面は縦ハケ目、内面はなでている。内面には2~3cmの間隔に粘土紐のつなぎ目が残っており、器壁の凹凸が多い。

○方柱甕 (24) 断面略長方形の柱状をなす長甕である。器高は41cmあり、中位でやや太くなっている。口縁部を除いて外面は縦ハケ目が、内面には横ハケ目があり、一部ヘラで削っている。内面には粘土紐のつなぎ目が残っている。4個体出土している。

○鍋 (29・30) 外反する短い口縁部と、体部上半の最大径部分に把手をつけた丸底の鍋である。口径35cm、器高24.5cmのもの(29)と、口径43cmの大形のもの(30)がある。把手は器壁に挿入し上に曲げ鉤状を呈し、断面は楕円形になっている。体部外面の上方は縦ハケ目、下方は斜ハケ目を施しており、29では中央部を横にヘラで削っている。内面は、29では上半横ハケ目、下半は下から上にヘラ削りをおこない、30ではなでており一部に粘土紐のつなぎ目がある。

○瓶 (25) 口径26.5cm、底径15cm、器高31.5cmの筒状の体部のやや上位に鉤状把手をつけ、底部に半円形の蒸気孔を2個あけた瓶である。口縁端部の形態は略三角形を呈し、方柱甕のそれとよく類似している。口縁部は横なで、体部は上半にハケ目を施し、下半を縦にヘラ削りしている。削りの方向は、外面は上から下へ、内面は下から上の方向である。

(2) S K 15出土の土器 (P L13, P L14, P L27-86)

S K 15から出土した一括土器で、土師器と須恵器の組合せから編年上の位置を明確にしうる好資料である。須恵器は、杯A・杯B・蓋A・蓋B・椀・長頸壺・甕B・甕C等があり、土師器としては、杯A・杯B・皿・甕A・甕B・鍋がある。S B 1に較べると須恵器の種類と量は多いが、それでも須恵器は全体の1~2割ぐらいである。

a 須恵器

○杯A (31) 外傾する口縁部と平らな底部からなる杯で、口径15cm、高さ3.7cmをはかる。口縁端部は多少外反する。底部はヘラ切り不調整底である。

○杯B (33) 外傾する口縁部と底部の境は棱をなす。高台はこれよりやや内側にあり、外側にふんばっている。底部は下面をヘラ削りし、内面を一方向になでている。北浦古窯跡出土の杯⑨Bとよく類似している。

○蓋A (37) 平らな天井部に中央のややふくらんだつまみを付けた蓋で、口縁端部は下方に小さく折れる。天井部上面は右まわりのロクロでヘラ削りしている。天井部下面には同心円がかすかに残る。天井部上面全体に淡緑色の自然釉が附着している。

○蓋B (34~36) 蓋Aに較べて天井部の丸いものを蓋Bとした。口径15~17cmの小型のものと、27cmの大型のものがある。つまみは蓋Aとさして変らない。いずれも天井部上面を右まわりのロクロでヘラ削りをおこなっている。36の天井部下面には同心円文がかすかに残っている。

○椀 (32) 高さ7cmをはかる外傾する長い口縁部と平らな底部の椀である。底部下面は左まわりのロクロでヘラ削りしている。

○長頸壺 (38) ラツバ状にひらく長い頸部の破片で、2条の沈線がめぐる。体部以下は不明。

○甕B (39) 筒状を呈する体部の破片で、底は平底である。体部外面は、一部平行叩き目が残っており、底部に近い部分はヘラ削りを施している。底部は上面が不定方向のなで、下面は一方向にヘラで削っており周辺部は円周にそって削っている。

○甕C (40) 口径45cm、推定器高40cmをはかるほぼ直立する短い口縁部と上位に最大径のある体部と平らな底とからなる大型の甕である。体部外面は縦方向の平行叩き目、内面には凹部の浅い同心円文がある。底部上面はなでているが凹凸が多く、底から体部下端にかけては荒いカキ目がある。

b 土師器

○杯A (43・44) 小型の43は器表磨滅して技法不明。底部下面に大きな×印がヘラで書かれている。44は口縁部下方から底部をヘラ削りしている。暗文はない。

○杯B (46) 下端が外に肥厚する高台の破片。保存不良。皿になるかもしれない。

○皿 (45) 口径20cm、高さ2.4cmの皿で、口縁端部は内側に肥厚する。口縁部内面には方射状暗文がある。底部上面の暗文の有無は破片が小さく不明。口縁部外面と底部下面はなでている。

○甕A (48~51) 口径15~18cm、高さ12~17cmの小型の甕。外反する口縁部の端はS B 1と同様、様々な形態をとる。体部外面は例外なく縦ハケ目を施すが、52のみ下半をヘラ削りしている。また、52の内面はなでのみでハケ目はない。口縁部内面のハケ目はないものが多い。

○甕B (53・54) 口縁部の破片であるが、S B 1出土の甕Bと形態・技法ともよく一致する。

○鍋 (55) 鉤状の把手や口縁部はS B 1出土の鍋とよく似ているが、55の底部は平底に近い。外面は縦ハケ目、内面は上半が凹凸の多いなで、下半は下から上にヘラ削りしている。

○瓶 (47) 底部を欠くが、筒状の体部に鉤状の把手のつく瓶である。形態はS B 1と同様だが、これは現状では外面下方にヘラ削りがなく、内面下位もヘラで削らずなでている。

○甕 (P L27-86) 高さ2.5~4cmの鋸の付く焚口部の破片で、一端に孔がある。内外面ともに粗いハケ目がある。

(3) S B 8出土の土器 (P L15-56~64)

- 出土土器はすべて土師器で量も多くない。器形は杯A・皿・高杯B・甕A・甕B・瓶である。
- 杯（56・58） 56は外傾する口縁部の杯で、口縁部内外面は横なで、底部下面是指先でおさえている。底部上面にはラセン状暗文がある。58の口縁端部内面にはわずかな稜ができる。底部下面是ヘラ削り、内面は保存不良で技法、暗文の有無は不明。
 - 皿（57） 口径17cm、高さ3cmの皿。保存不良。このほか、底部の破片で杯皿の区別はできないが、上面にラセン状暗文、下面が不調整のものが2片ある。
 - 高杯B（59） 脚部の破片である。外面にはハケ目があり、面取りしていない。
 - 甕A（61） 口径15.5cm、高さ15cmの外反する短い口縁部、中位に張りのある体部、やや平らな底部からなる甕である。外面は体部を縦方向のハケ目、底部は不定方向のハケ目を施す。内面は体部上半を横ハケ目、下半は下から上へのヘラ削り、底部上面は不定方向になでている。
 - 甕B（60・62・63） 体部の長い大型の甕である。60は口縁部附近の破片であるが、内面に縦ハケ目がある。62は他のものより肩がよく張っており、ハケ目も粗い。63の内面は上半がなで、下半がヘラ削りで、この整形技法も他にはみられない。
 - 瓶（64） 半円形の蒸気孔を2ヶ所あけた底部の破片である。その形態はSB1の25と同様であるが、外面の整形技法が異なっており、下底まで縦ハケ目がある。

(4) その他各所出土の土器 (PL15-65, PL16-66~70)

発掘区の各所で出土した土器で、器形が比較的明らかで、この時期に比定される土器である。65と70は、須恵器の甕である。65は口径36cm、高さ65.5cmをはかる外反する口縁部と中位に最大径のある大きな甕である。外面は平行叩き目、内面にはカキ目がある。70は小型の甕で体部外面は叩き目の上にカキ目を施している。内面はなでている。67はSB1の11、SK15の44とよく似た杯である。口縁部外面の下半と底部をヘラ削りしている。69は瓶の破片でSB1出土の25とよく似ている。下半は下から上へのヘラ削り、上半は横方向に引いた工具のあたりはあるが、ハケ目状の横線はない。

E 鎌倉・室町時代

この時期の土器は土塙・溝などから出土しているが、まとまって出土した例は少い。その種類は土師器としては小皿・甕・鍔釜等が出土しており、山茶椀・陶器・青磁等もある。その他、五輪塔も出土している。

(1) 土師器・山茶椀・陶器・青磁 (PL16-71~85, PL28-87~88)

- 小皿（71~73） 口径10~12cmの小型の皿で、手すくねで作っている。底部は非常に薄い。
- 甕（78~84） 短い口縁部をもつ浅手丸底の甕である。大小様々あって、小さいもので口径18cm、大きいもので30cmある。体部は最大径がほく中位にあり、やや偏平である。口縁端部の作りは特徴的で、折り曲げてなでつけ内面が小さな段状を示す。体部下半はいずれもヘラ削りをして

しているが、上半はハケ目のあるものと、ないものがある。内面は下半をヘラ削りしている。土器は一般に薄い。胎土中には砂粒が多い。外面には全面に厚く煤が付いている。

- 鍔釜（85） 口からやや下に巾3cmの鍔をめぐらしたもの。鍔はやや下さがりにつけている。口径は32cmある。口縁端部は内側に粘土を折り曲げてなでつけている。
- 山茶椀（75・76・PL28-87・88） 外傾する口縁部と断面三角形状のくずれた高台のつく山茶椀である。高台には稲穀痕が付く。底部下面には糸切り痕が残っている。
- 陶器（77） 端部が折れて下にさがる壺の頭部の破片である。茶褐色を呈する常滑焼特有の器表を呈している。
- 青磁（74） 削り出し高台の椀片である。底部下面をのぞいて全面に濁緑色の釉がかり、外面にうすい縦方向の線がみられる。おそらく宋磁であろう。

(71~80~84は(Q, 40) 区土塙出土の一括資料)

(2) 五輪塔 (PL28-89~94)

五輪塔はSX31・32東側と、さらに東のすでに土取りされた場所で発見した。いずれも組になっておらず、黒色土中から単独で出土した。石材はすべて粗粒砂岩である。

- 地輪（93・94） 93は一辺17cm、高さ12cmの上面が平らで、下面に浅い凹みのあるもの。94は一石剥抜五輪塔のうちの地輪で縦横とも14.5cmをはかる。

- 火輪（91・92） 91は軒の巾18cm、高さ11.5cm。屋根の頂には径5cm、深さ5cmの枘穴がある。軒の厚さは中央で3.5cmで心反りとなり両端の厚さは5cmある。軒の下端にはわずかな反りがある。室町中期頃の作と考えられる。92は軒巾19cm、現高11cm。91にくらべて軒の厚さも薄く軒の反りが両端で急にきつくなる。また軒下端の反りもみられないので91より時期の下る室町末期のものと思われる。

- 風輪・空輪（89・90） 風輪と空輪が1石からなるものが2点出土している。

- ① 久永春男・杉崎章、新海公夫、井関弘太郎「石瀬貝塚」1962
- ② 紅村弘「東海の先史遺跡」
- ③ 加藤岩蔵他「中条貝塚」刈谷市教育委員会 1968
- ④ 島田堯・小島俊次「布留遺跡」奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報10、1958
- ⑤ 山内清男「日本原始美術」I 1964
- ⑥ 鈴木敏雄「三重の遺跡と遺物」第一集 楽山文庫 1949
- ⑦ 吉田富夫「伊勢国の弥生文化」考古学8-6 1937
- ⑧ 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園研究論集第10号 1966
- ⑨ 山沢義貴「北浦古窯址群発掘調査報告」四日市々教育委員会 1970

V 結語

今回の金剛坂遺跡の発掘調査は限られた期間での緊急発掘であり、遺跡の範囲が約7万m²におよぶ広大なもので、その一部分の発掘であった。そのため、今回の調査に於いて、金剛坂遺跡の全容を明らかにし得たとはい難いが、いくつかの成果をあげることが出来た。以下、若干の私見を述べて結語としたい。

まず、弥生時代前期の土器であるが、これらは佐原真氏の分類によれば第Ⅰ様式の新段階に比定される。佐原氏は更に新段階が前、後半の二期に分れるという。本遺跡の土器の殆んどが、後半に属するようである。一方、本遺跡に多く見られる赤褐色の土器は、紅村弘氏によって、西志賀貝塚の報文の中で、第Ⅱ類、亜流の遠賀川式土器とされ、三重県下で主体をしめるとされたものに相当するようである。赤褐色の土器は今回の調査に於いてわずかながら増加したが、まだその量は決して多くはない。現在の所では津市上村遺跡、長谷山遺跡の採集品に見られ、四日市々大谷遺跡では比較的多量の土器が出土しており、その分布は一応広範囲にわたっている。しかし、真田幸成氏は鈴鹿市上箕田遺跡の報告の中で紅村説は正しくないとされている。第一次上箕田報告にも正統の遠賀川式土器が多いと述べられている。たしかに、上箕田遺跡では赤褐色の土器が少ないようあり、その特徴的な口縁部の内側に四線状の沈線がめぐる壺形土器及び、腹形土器の半裁竹管の使用例は少ない。上箕田遺跡以外の諸遺跡が赤褐色の土器が主体を占め、正統の遠賀川式土器が少ないとされる事が（勿論、調査された遺跡の僅少な段階での極論は差し控えなくてはならないが）一応認められるならば、上箕田遺跡は三重県下に於いて特殊な性格を有しているといわなくてはならない。それは上箕田遺跡のみが標高数米の沖積地に位置しているのに対し、当遺跡をはじめとし、大谷遺跡等は沖積地を臨む台地上に位置しているという立地の相違によるものであろうか。遠賀川式土器の伝播という問題とともに、所誦亜流の土器とされる土器群の出現の時期及び伝播も今後の問題であろう。

次に、方形周溝であるが、当遺跡の時期のは、明らかな方形周溝は次のように順序づけられる。S X31・32→S X36→S X14→S X26。中期に属するS X31・32及びS X36は陸橋部を有しない方形周溝である。以前われわれが発掘した鈴鹿市東庄内B遺跡の方形周溝は一つの隅に陸橋部分を有するもの及び相対する隅に陸橋部の有するものがあった。現在、方形周溝の最古のものは滋賀県南滋賀遺跡の例とされている。当遺跡のS X31、32やS X36及び東庄内B遺跡の時期は南滋賀遺跡とは同時期と考えられるものである。方形周溝の陸橋部の有無は、その初期に於いて既に各種のバラエティーに富んだものであったと思われる。

今回の方形周溝の発見は四日市々大谷遺跡、東庄内B遺跡につづくものである。今回もまた主体

部と思われるものは検出出来なかつた。未調査地域、既に破壊された地域を考えあわせてみると、付近に更に方形周溝の存在が予想され、その数は十基近くあったものと思われる。しかし、今回の調査では住居址の検出はなかった。一般に方形周溝に伴う集落はそんなに離れた場所でないのが普通である。当遺跡に於いても台地中央部もしくは現在墓地になっている個所及び砂利採取された個所に住居址から出るかもしれない。

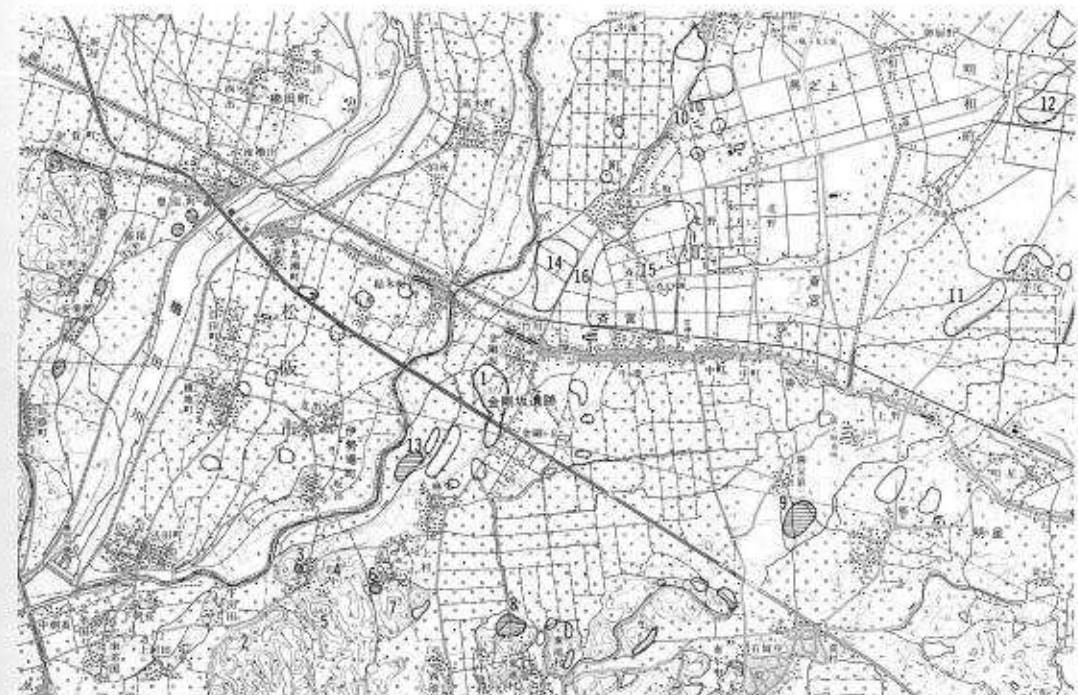
飛鳥時代の土器は、他の時期にくらべて量も多くまた遺構毎にまとまって出土している。ことにS B1、S K15では豊富な資料を得ることができた。その種類は、須恵器としては杯・椀・蓋・長頸壺・甕等、土師器としては、杯・皿・蓋・壺・甕・鍋・瓶等各遺構出土品とも器形、整形技法が共通しており、同時期のものと考えられる。土師器と須恵器の割合は土師器が圧倒的に多く、須恵器の出土が目立ったS K15においても全体の1~2割程度であった。土師器のなかで特徴的な器形としては、円筒状と方柱状を呈する長甕がある。整形技法からみれば、内外面ともハケ目整形を多用し内部をヘラ削りする技法が支配的である。また杯・皿等では、底部と口縁部下半をヘラ削りしているものが多い。暗文を施したものもあり多くない。一方須恵器では蓋内面に同心円文が残っているものがあり注意される。

時期については、S K15出土の須恵器が藤原宮跡、北浦古窯址出土品に類似しており7世紀末から8世紀初頭におかれよう。この時期の土器はこれまで伊勢においては貝野道跡をはじめいくつかの出土例がある。しかし土師器と須恵器が共存し、量的にもまとまって検出された例はとばしい。当遺跡の出土品はこの時期の一括土器として土器編年上に重要な資料を提供したといえよう。

鎌倉時代の遺物は、S D23・S D24・Q-40土塙等から出土しているが、量的にはさほど多くない。その種類は、土師器小皿・同甕・山茶椀・常滑焼壺・青磁碗等である。このなかで注意されるのは土師器甕で、端部を内側に折り曲げた口縁部を持つており、器高も低い。整形技法からみても、砂粒の多い粘土を使用し、体部下半の内外をヘラ削りして全体に薄く仕上げている。こうした土師器甕と山茶椀の組合せは、伊勢においては智積廃寺跡・東庄内B遺跡・畠遺跡等の集落跡、また上野山12号墳・上井生3号墳・長谷山大山田支群5号墳等の再利用時の遺物として検出されている。当遺跡の出土品を智積廃寺S B13出土の一括資料と対比してみると、山茶椀は口径が小さく腰の張りが少なく台の作りも雑になっており、土師器については、体部最大巾と口径が小さく腰の張りが少なく台の作りも雑になっており、土師器については、体部最大巾と口径との差が少く、口縁部の折り曲げた後でのつけが強くなるなど、行基焼第2型式併行とされるS B13より新しい様相がうかがわれる。ここで、少量の山茶椀のみによって常滑窯出土土器の編年と対比することはむずかしいが、これらは天神4号様式にあたると考えられ、鎌倉末から室町初期の所産とされよう。

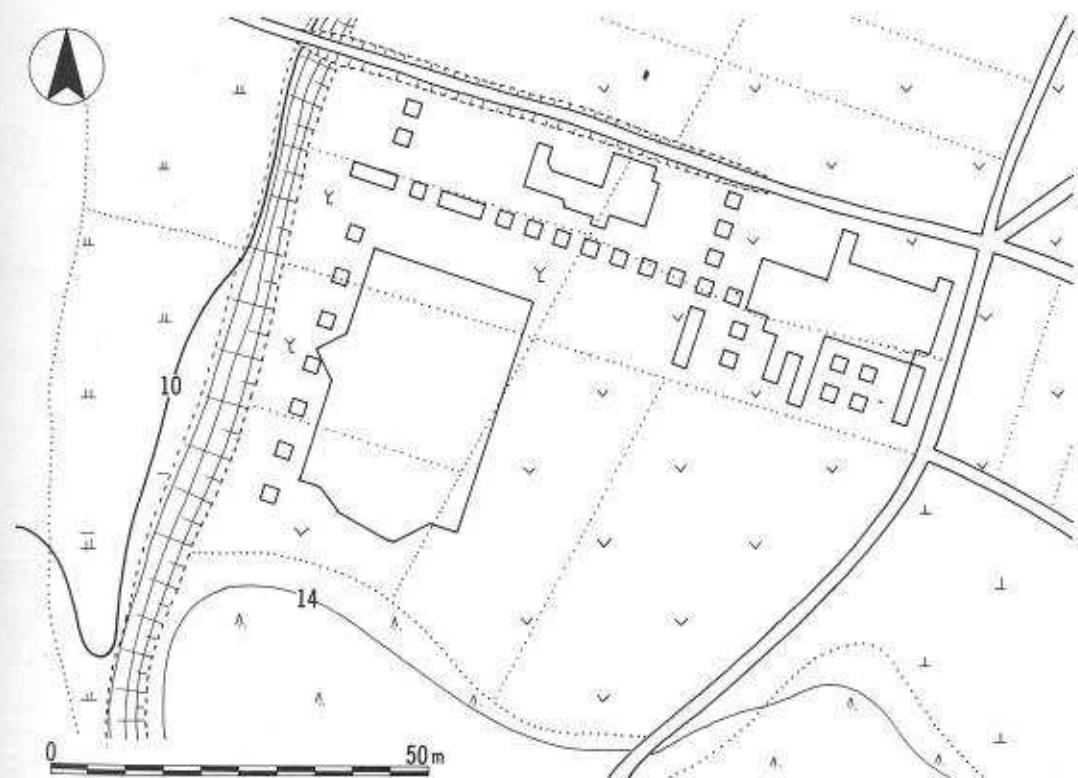
① 佐原真「山城における弥生式文化の成立一歳内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置」史林50-5
1967

- ② 佐原真氏御教示による。
 ③ 紅村弘「名古屋市西志賀貝塚」名古屋市文化財叢書19 1957
 ④ 三重大学所蔵
 ⑤ 小玉道明「大谷遺跡発掘調査報告書」四日市々教育委員会 1966
 二次調査分は現在、四日市々立歴史資料館に保管されている。
 ⑥ 真田幸成、大場範久、仲見秀雄「上箕田」鈴鹿市教育委員会 1967
 ⑦ 三重県立神戸高校郷土研究クラブ編「上箕田」 1961
 ⑧ 昨年調査した資料に於いても同様の事がいえそうである。
 ⑨ 小玉道明、山沢義貴「東庄内B遺跡」東名阪道路埋蔵文化財調査報告 三重県教育委員会 1970
 ⑩ 大塚初重、井上裕弘「方形周溝墓の研究」陵台史学24号 1969
 ⑪ 注5に同じ。
 ⑫ 岸俊男、猪熊兼勝他「藤原宮」奈良県教育委員会 1969
 ⑬ 山沢義貴「北浦古窯址群発掘調査報告」四日市市教育委員会 1971
 ⑭ 林博通「貝野遺跡」四日市々教育委員会 1969
 ⑮ 小玉道明「智積庵寺」「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1970
 ⑯ 注9に同じ。
 ⑰ 仲見秀雄「垂道跡」「国鉄伊勢線開通遺跡調査報告」鈴鹿市教育委員会 1966
 ⑱ 山沢義貴、谷本耕次「上野道跡、上野山古墳群発掘調査報告」一志町教育委員会 1971
 ⑲ 下村登良男「上井生3号墳発掘調査報告」一志町教育委員会 1971
 ⑳ 小玉道明氏の御教示による。
 ㉑ 横崎彰一他「古代・中世における手工業の発達、窯業一東海」「日本の考古学歴史時代」上 1967



金剛坂遺跡位置図

横線：弥生時代遺跡、○印：古墳時代以降遺跡
(国土地理院、1:25,000、松阪、明野)



発掘区位置図 (1 / 1000)